

釈尊の弟子や諸尊と『法華経』の思想的特色

関戸堯海

I、はじめに

『法華経』には「諸法実相」「二乗作仏（菩薩道・開会思想・授記思想）」「久遠実成」などのすぐれた思想的特色があることが知られている。方便品・信解品・薬草喻品・化城喻品・涌出品・寿量品・不軽品などの対告衆の弟子たちや、そこに登場する諸尊は、すぐれた思想を説き示すために、それぞれ重要な役割を果たしている。そこで、本稿ではこれらの弟子や諸尊が重要な教義を説き示すために果たした役割を中心に、『法華経』のすぐれた思想的特色の一面について考察したい⁽¹⁾。

II、釈尊の弟子や諸尊と『法華経』の思想的特色

1、舍利弗と三止三請の懇請（一乗思想・諸法実相）方便品

釈尊の十大弟子のなかでも、智慧第一と称される舍利弗は、方便品での対告として「諸法実相」の重要教義を導き出す重要な役割を果たしている。舍利弗は懷疑論者のサンジャヤの弟子であったが、サンジャヤの弟子二百五十人を連れて、目連とともに釈尊に帰依したといわれる。釈尊が出現する以前には、自由な思想家が多くあって、その代表的な六人を「六師外道」と称している。その一人がサンジャヤであり、王舎城のあたりに止住していたという。その思想は懷疑論あるいは不可知論ともいべきものであり、人生の命題について捉えどころないの答えを示すというような特色を持っていたが、不思議な魅力によって多くの門下を惹きつけていた。舍利弗と目連は門下たちのなかで、たちまち頭角をあらわしたが、すべての懷疑論・不可知論がそうであるように、不思議な魅力があっても、人生を託すべき究極の思想ではあり得なかった⁽²⁾。

釈尊の代わりに説法するなど信任の厚かった舍利弗が、『法華経』方便品では「三止三請」（三止三請重請許説）の丁寧な儀式を経て、「諸法実相」「一乗思想」などの中心的な教義が説き示されていくための重要な役割を演じている。すなわち、釈尊は『法華経』以前の諸経で説かれた三乗思想を否定して、方便を捨てて真実平等の一仏乗を説こうとするが、一乗思想が難解であるとして詳説することを止める（三止）。これに対し舍利弗が三度にわたって説法を願い（三請）、それを釈尊が許可して（許説）、重ねての舍利弗の請（重請）によって「一乗思想」が明説されていく。方便品の「三止三請」は次のようである。

《第一止》止みなん舍利弗、復た説くべからず。所以は何ん。仏の成就したまへる所は、第一希有難解の法なり。唯仏と仏と乃し能く諸法の実相を究尽したまへ

り。

《第一請》爾の時に舍利弗、四衆の心の疑を知り、自らも亦未だ了らずして。仏に白して言さく。世尊、何の因・何の縁あってか、慇懃に諸仏第一の方便甚深微妙難解の法を称歎したまう。我昔より来、未だ曾て仏に従って、是の如き説を聞きたてまつらず。今者四衆咸くみな疑あり。唯願わくは世尊、斯の事を敷演したまえ。世尊、何が故ぞ。慇懃に甚深微妙難解の法を称歎したまう。

《第二止》その時に仏、舍利弗に告げたまわく、止みなん止みなん、復た説くべからず。若し是の事を説かば、一切世間の諸天及び人、皆当に驚疑すべし。

《第二請》舍利弗重ねて仏に白して言さく、世尊、ただ願わくはこれを説きたまえ。ただ願わくはこれを説きたまえ。所以は何ん、この会の無数百千万億阿僧祇の衆生は、曾て諸仏を見たてまつり、諸根猛利にして、智慧明了なり。仏の所説を聞きたてまつらば則ち能く敬信せん。

《第三止》仏復、止みなん舍利弗、若し是の事を説かば、一切世間の天・人・阿修羅、皆当に驚疑すべし。増上慢の比丘は將に大坑に墜つべし。

《第三請》その時に舍利弗、重ねて仏に白して言さく、世尊、ただ願わくはこれを説きたまえ。ただ願わくはこれを説きたまえ。今此の会中の我が如き等比百千万億なるは世世に已に曾て仏に従いたてまつりて化を受けたり。此の如き人等、必ず能く敬信し、長夜安穩にして饒益する所多からん。

《許説》その時に世尊、舍利弗に告げたまわく。汝已に慇懃に三たび請じつ、豈に説かざることを得んや。汝今諦に聴き。善く之を思念せよ。吾当に汝が為に分別し解説すべし。此の語を説きたまう時。会中に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、五千人等あり。即ち座より起って仏を礼して退きぬ⁽³⁾。

方便品で釈尊は、瞑想の世界からゆったりと静かに起ちあがって、舍利弗に向かって「あらゆる仏陀の智慧は、甚だ深く、しかもはかりしれない。したがって、仏陀の智慧に入る門は理解することが難しく、入りにくいのである」と表明した。さらに釈尊は「やめておこう舍利弗よ、どのようにしても、仏陀の悟りの世界を説き明かすことは困難である。仏陀が到達した境界は、崇高であり到達しがたい難解な法であり、ただ仏陀と仏陀のみが、究め尽くすことができるからである」と語った。そして、ここに「十如是」が説き示されて、すべての事物のありのままの姿、真実のありようについての「諸法実相」が明らかにされる。また、天台大師智顛が十如是を柱として、空・仮・中の円融三諦の思想を樹立したことは良く知られている⁽⁴⁾。

日蓮聖人は、『法華経』の思想的な二大特色として、迹門の二乗作仏と本門の久遠実成を挙げる。文永九年（1272）に流罪地の佐渡で著作した『開目抄』では、『法華経』の開会の法門が説かれたとき、諸法実相が明らかにされ、やがて久遠実成も明らかにされていくことを次のように述べる。

法華經の正宗、略開三・広開三の御時、唯仏と仏のみ乃し能く諸法の実相を究尽す等、世尊は法久しうして後等、正直に方便を捨てて等、多宝仏迹門八品を指て皆是真実なりと証明せられしに何事をか隠すべき。なれども久遠寿量をば秘せさせ給て、我始め道場に坐し樹を觀じてまた経行す等云云。最第一の大不思議なり⁽⁵⁾。

2、須菩提・迦旃延・迦葉・目連（二乗の成仏）信解品

譬喩品で舍利弗に将来、華光如来となるであろうとの成仏の保証が与えられたのを聞いて、信解品で須菩提（解空第一）・迦旃延（論議第一）・迦葉（頭陀第一）・目連（神通第一）の四大声聞は大いに感激する。

その時に慧命須菩提・摩訶迦旃延・摩訶迦葉・摩訶目犍連、仏に従いたてまつりて聞ける所の未曾有の法と、世尊の舍利弗に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまうとに希有の心を発し、歡喜踊躍して、即ち座より起って衣服を整え、偏に右の肩を袒にし右の膝を地に著け、一心に合掌し曲躬恭敬し、尊顔を瞻仰して仏に白して言さく⁽⁶⁾。

われら今日、仏の音教を聞いて、歡喜踊躍して、未曾有なることを得たり。仏は声聞がまさに作仏することを得べしと説きたもう。無上の宝聚、求めざるにおのずから得たり⁽⁷⁾。

すなわち、声聞が成仏するであろうとの、釈尊の尊い説法を聴いて、この上ない宝珠を得たことを心から喜ぶ。そして、「長者窮子の譬喩」を語って、方便品から示されてきた教えについての領解が正しいかどうかを確かめる。さらに、藥草喩品のはじめに「その時に世尊、摩訶迦葉および諸の大弟子に告げたまわく。善哉善哉、迦葉、善く如来の真実の功德を説く。誠に所言のごとし」⁽⁸⁾とあって、釈尊が四大声聞の領解が正しいことを称赞し、「三草二木の譬喩」を説いて、その趣旨を徹底させる。

『法華經』では、舍利弗に続いて、多くの仏弟子たちに順次、将来成仏の保証が与えられている。この授記思想は『法華經』のすぐれた思想的な特色である⁽⁹⁾。

ところで、『開目抄』では、『法華經』以前の諸經において二乗の成仏が否定され続けてきたことについて、以下のように述べている。

諸の声聞等者前四味の経々にいくそばくぞ（幾許）の呵嘖を蒙り、人天大会の中にして恥辱がましき事其の数をしらず。しかれば迦葉尊者の涕泣の音は三千をひびかし、須菩提尊者は亡然として手の一鉢をすつ。舍利弗は飯食をはき（吐）、富楼那は画瓶に糞を入ると嫌る。世尊鹿野苑にしては阿含經を讚歎し、二百五十戒を師とせよ、なんと慇懃にほめさせ給て、今又いつのまに我所説をばかうはそしらせ給と、二言相違の失とも申ぬべし⁽¹⁰⁾。

もろもろの声聞たちは、『法華経』が説かれる以前の諸経典では、たびたび叱られ、人間界・天上界の方々の集う説法の間では、どれほど辛い思いに堪えたことだろうかと言う。だからこそ、迦葉尊者が（『維摩経』の不思議解脱の教えを聞いても十分に理解できず、菩提心を起こすことができないと歎いて）号泣する声は三千世界に聞こえ、須菩提尊者は（維摩居士のところに鉢に行ったところ、維摩は須菩提の鉢に飯を盛り、飯はこれ諸法であるとして、大乘の教える空の理を説いて邪見をいましめたので）茫然として言葉もなく鉢を置いて去った。また、舍利弗は（仏陀から不浄の食を摂ったといわれたと伝え聞いて）ただちに食べたものを吐き、富楼那は維摩居士から「禅定に入って人の心を観察して説法せよ。高貴な宝器に汚れたものを置いたようなものだ」と誠められたという話を紹介している。これらは『維摩経』『大智度論』に基づく話と考えられるが、須菩提について『維摩経』弟子品を見ると次のようにある。

須菩提、仏に白して言さく、世尊、我は、彼れに詣りて、疾を問うに堪任せず。所以は何となれば、憶念するに、我、昔、その舎に入り、従って食を乞えり。時に、維摩詰、我が鉢を取りて、飯を盛り満し、我に謂って言わく、唯、須菩提、もし、よく食に於いて等しくば、諸法もまた等し。諸法等しくば、食に於いてもまた等し。かくの如く乞を行ぜば、すなわち食を取るべし。（中略）汝に供養する者は三悪道に墮し、為に衆魔と一手を共に、諸の労侶となりて、汝と衆魔および諸の塵勞等と異なりあること無く、一切衆生に於いて怨心あり、諸仏を謗り、法を毀り、衆の數に入らずして、ついに滅度を得ず。（中略）時に、我、世尊、この語を聞きて、茫然として、これ何の言かを識らず。何を以って答えんかを知らず。すなわち、鉢を置いて、その舎を出でんと欲す⁽¹¹⁾。

日蓮聖人は二乗作仏を『法華経』のすぐれた特色として重視している。そのため、譬喩品・信解品に示される二乗の成仏を聞いた四大声聞の歓喜と領解を通して、『維摩経』等にみられる二乗成仏の否定と『法華経』が対局にあることを述べている。そして、『法華経』では、声聞・縁覚の境地にある修行者、そして菩薩をはげまして、まっすぐに一仏乗の悟りの道を進んでいることが明らかにされている。

3、大通智勝如来・弥勒菩薩（釈尊の永遠性）化城喩品・涌出品・寿量品 《大通智勝如来の化導》

釈尊の永遠性が如来寿量品に明説されることは、よく知られている。ところが、すでに化城喩品において、その萌芽ともいえるべき釈尊の永遠の教化についての説示がみられる。化城喩品では、釈尊の教化は、はるか遠い過去からのものであり、釈尊は遠い過去に、この世界に住む人々を救おうという誓願を持って出家し、大

通智勝如来に導かれて、この娑婆世界の衆生を教化し続けてきたことが明らかにされる。

釈尊より以前、三千塵点劫の昔の、大相という時代の好城世界に大通智勝如来が出現した。その如来は出家する前は国王であり、十六人の王子があった。十六王子も父の仏道修行のありさまを見て出家し、それぞれの世界の衆生を救う誓願を立てて、法を説いた。その第十六王子が釈迦牟尼仏で、東北方の娑婆世界の悩める衆生を救うために成道したのである。このありさまについて化城喩品には、次のようにある。

仏、諸の比丘に告げたまわく、この十六の菩薩は、常に楽ってこの妙法蓮華経を説く。一一の菩薩の所化の六百万億的那由佗恒河沙等の衆生は、世世に生まるる所、菩薩と俱にして、それに従い法を聞いて、悉くみな信解せり。(中略)第十六は我れ釈迦牟尼仏なり。娑婆国土において、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり。諸の比丘、我等沙弥たりし時、各各に無量百千万億恒河沙等の衆生を教化せり。我に従って法を聞きしは、阿耨多羅三藐三菩提をなしにき⁽¹²⁾。

いまここで教化している三乗の人々は、大通智勝如来のときから釈迦牟尼仏と師弟となった因縁深きものである。その教えを聞いて成仏したものもあり、成仏の教えを忘れ、あるいは信じないで二乗のままであっても、かならずその教えを思い出し、自覚して成仏をとげることができるとする。

《弥勒菩薩の疑念・涌出品》

弥勒菩薩は、釈尊の滅後、五十六億七千万年を経過したときに、上方の兜率天からこの世に出現して、仏陀になるといわれる未来仏である。日蓮聖人の正元元年(1260)の『守護国家論』には、『法華経』の会座に列していた弥勒菩薩が放光瑞を見て、諸の世界の諸仏の説法の次第を述べて、文殊菩薩にその理由を問いかけている様子について述べられる。

法華経の序品に放光瑞の時、弥勒菩薩十方世界の諸仏の五時の次第を見る時、文殊師利菩薩に問うて云く、また諸仏聖主師子、経典の微妙第一なるを演説したもう。その声清浄に柔軟の音を出して、諸の菩薩を教えたもうこと、無数億万なるを觀ると⁽¹³⁾。

ここでは、三世十方諸仏説法の儀式次第が同一ならば、釈尊の説法もはじめは『華嚴経』であるべきことが述べられて、いよいよ『法華経』の説法が開幕するありさまについて検討されている。この点で序品における弥勒菩薩の重要な役割が理解できる。そして、従地涌出品において弥勒菩薩は、釈尊の永遠性が説き明かされていくための、極めて重要な役割を演じている。

従地涌出品では、大地の下の虚空から、六万恒河沙もの地涌の菩薩が出現する

という、不思議な光景が展開される。その不思議な光景はどのような「ゆかり」によるのか。そのような疑念を懐いた聴衆を代表して、弥勒菩薩から発せられた疑念によって、如来寿量品では五百億塵点劫の釈尊の永遠性が明らかになる。涌出品には、地涌の菩薩の出現について、次のようにある。

その時に仏、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく。止みね善男子、汝等がこの経を護持せんことを須いじ。所以は何ん、我が娑婆世界に自ら六万恒河沙等の菩薩摩訶薩あり。一一の菩薩に各六万恒河沙の眷属あり。是の諸人等、能く我が滅後において、護持し誦誦し広くこの経を説かん。仏これを説きたもう時、娑婆世界の三千大千の国土、地みな震裂して、その中より無量千万億の菩薩摩訶薩あつて同時に涌出せり。この諸の菩薩は、身みな金色にして、三十二相・無量の光明あり。先よりことごとく娑婆世界の下、この界の虚空の中に在って住せり。この諸の菩薩、釈迦牟尼仏の所説の音声聞いて、下より発来せり⁽¹⁴⁾。

他方から来た数多くの菩薩たちが、釈尊の滅後に『法華経』を布教することを申し出たが、釈尊はそれをおしとどめる。すると、娑婆世界のすべての国土が振動し破裂して、大地の下の虚空から大勢の徳の高い菩薩たちが涌出した。この不思議な光景を見て、弥勒菩薩をはじめとする聴衆は次のような疑念を持った。

時に弥勒菩薩摩訶薩、八千恒河沙の諸の菩薩等の心の所念を知り、竝に自ら所疑を決せんと欲して、合掌し仏に向いたてまつりて、偈を以て問うて曰さく、無量千万億、大衆の諸の菩薩は、昔より未だ曾て見ざる所なり。願わくは両足尊説きたまえ。これいずれの所より来れる。何の因縁を以て集れる。巨身にして大神通あり、智慧思議しがたし。その志念堅固にして、大忍辱力あり。衆生の見んと樂う所なり。これ何れの所より来れる⁽¹⁵⁾。

この会衆が懐いた疑いに対する答えは、次の如来寿量品で明らかにされることとなる。そのため、従地涌出品は、構成上からいうと、如来寿量品の導入部であり、如来寿量品で釈尊の永遠性が明らかにされる伏線となっている⁽¹⁶⁾。

《釈尊の永遠性・寿量品》

涌出品での地涌菩薩の出現についての弥勒菩薩の疑念に答えて、如来寿量品では、釈尊みづからが久遠の教導の全容を明らかにする。寿量品には、釈尊の永遠性について、次のようにある。

その時に世尊、諸の菩薩の三たび請じて止まざることを知しめして、之に告げて言わく。汝等諦かに聴け、如来の秘密・神通の力を。一切世間の天・人、及び阿修羅は、みな今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮をいでて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと

おもえり。然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佉劫なり。譬えば五百千万億那由佉阿僧祇の三千大千世界を、たとい人あって抹して微塵となして、東方五百千万億那由佉阿僧祇の国を過ぎてすなわち一塵を下し、是の如く東に行いてこの微塵を尽くさんが如き⁽¹⁷⁾。

地涌の菩薩が大地から数限りなく出現してくる不思議な光景を見て、弥勒菩薩と聴衆は釈尊の偉大さを示す何ごとかが説き示されるのではないかと思っていた。そこで、説法にじっと耳を傾けていると、釈尊は真理を体現した真実の世界を明らかにする言葉を、心から信じ理解すべきことを聴衆に告げ、それを三度繰り返す。すると、聴衆の弟子たちは、一心にお言葉を信受しますと、これもまた三度繰り返さず。前掲の寿量品の経文は、このような「三誠三請」（重誠重請）の荘厳な説法の儀式の後に、釈尊が「如来の秘密・神通の力を、あきらかに聴け」と述べ、不思議な力によって、凡夫に救いの手を差しのべてくださることが示される部分である。ここで、釈尊が成仏を完成したのは、五百億塵点劫の、はるか無限の過去だったことが明らかにされたのであり、雄大な仏身論が示されている。このように、釈尊の永遠性が明らかにされることは、末法の時代を生きる凡夫にとっての光明である。

4、童子のたわむれ・不軽菩薩（成仏は困難でないと言）方便品・不軽品 《童子がたわむれに仏塔を造る・方便品》

方便品には、子供が遊びとして塔をつくったとしても、それは仏道に到達するような大きな功德があると説かれる。

諸仏、滅度しおわって、舍利を供養する者、万億種の塔をたてて（中略）あるいは石廟をたて（中略）若しは曠野の中において、土を積んで仏廟をなし、乃至童子のたわむれに、沙をあつめて仏塔とせる。かくのごとき諸人ら、みなすでに仏道を成じき⁽¹⁸⁾。

ここで、多くの仏が入滅したのちに、その遺骨を供養するものは、万億の塔を立て、あるいは石のみたまやを立て、土を積みあげて仏のみたまやをつくり、子供たちがたわむれに、砂を集めて仏塔をつくる。このような人々は、みな仏道を完成していると説かれる。ここには、厳しい修行によらなくても、信仰によって成仏することができることが説き示されている⁽¹⁹⁾。

《不軽菩薩の仏性礼拝・不軽品》

常不軽菩薩品では、不軽菩薩の但行礼拝について説かれるが、そこには成仏は困難ではないと言う思想が示される。不軽品には、不軽菩薩の但行礼拝と、礼拝される人々の将来成仏について次のようにある。

この比丘、凡そ見る所ある、若しは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷をみな悉く礼拝讃歎して、この言を作さく。我深く汝等を敬う、敢て輕慢せず。所以は何ん、汝等みな菩薩の道を行じて、まさに作仏することを得べしと⁽²⁰⁾。

この故に行者 仏の滅後において 是の如き經を聞いて 疑惑を生ずることなかれ まさに一心に 広くこの經を説くべし 世世に仏に値いたてまつりて 疾く仏道を成ぜん⁽²¹⁾

一乗思想は、すべての人が成仏できることを説き、人間の本質は平等であるという認識に立っている。これは、釈尊の「四姓平等」の思想に基づいており、さらに『涅槃經』の「一切衆生悉有仏性」の思想へと発展していく。『法華經』には、仏性の言葉はないが、一乗思想は「悉有仏性」と同じ思想であると考えられる⁽²²⁾。

日蓮聖人は『撰時抄』に『涅槃經』卷九の如来性品から「凡夫の中において身命を惜まず、要必大乘方等、如来の秘藏、一切衆生皆仏性ありと宣説すべし」⁽²³⁾と引用し、また建治三年(1277)の『崇峻天皇御書』では「涅槃經には一切衆生悉く仏性有り」⁽²⁴⁾と『涅槃經』の仏性思想に言及している。

そして、『報恩抄』では、『涅槃經』卷九如来性品⁽²⁵⁾に『法華經』を「秋収冬藏」の「大収教」として優位に置き、『涅槃經』自らは「更に所作無きが如し」と劣位に置いていることを示す。さらに、『法華文句記』卷三下⁽²⁶⁾において「大經自ら法華を指して極と為す」と解釈している点を挙げて、「涅槃經をよむと申すは法華經をよむを申すなり」と述べ、『涅槃經』の「一切衆生悉有仏性」の思想も、『法華經』の二乗作仏に収めつくされるとの立場に立つ。その『報恩抄』の一節は次のようである。

涅槃經に云く、法華の中の如し等云云。妙樂大師云く、大經自ら法華を指して極と為す等云云。大經と申すは涅槃經也。涅槃經には法華經を極と指て候なり。而るを涅槃宗の人の涅槃經を法華經に勝ると申せしは、主を所従といひ、下郎を上郎といひし人なり。涅槃經をよむと申すは法華經をよむを申すなり⁽²⁷⁾。

また、『観心本尊抄』には「不輕菩薩は所見の人において仏身を見る。悉達太子は人界より仏身を成ず。此らの現証を以て之を信ずべきなり」⁽²⁸⁾とあり、常不輕菩薩が道行く人に会うたびに合掌し礼拝したのは、人々に本来具わっている仏身を見たからであり、悉達太子は、人身を受けて王宮に生まれたが、修行をかさね仏陀の身を達成したとする。そして、このような現実の証拠によって、人界に仏界を具えるという十界互具・一念三千の教えを信じるべきだと述べる。

このように、不輕菩薩は出会う人ごとに在家・出家を問わず礼拝し、「私はあなたを深く敬い、決して輕蔑しない。なぜならば、あなたがたは菩薩道を実

践して、将来成仏をとげるからである」と語りかけた。ここで、不軽菩薩は会う人ごとに、その人たちの将来成仏する可能性、すなわち「仏性」を礼拝していると考えられる。

Ⅲ、おわりに

『法華経』には、すぐれた思想的な特色がいくつもある。そして、それらの特色は、『法華経』に登場する弟子や諸菩薩、そして諸尊によって、いよいよ明らかかなものとされていく。本稿で取り上げた、舎利弗や弥勒菩薩・不軽菩薩・地涌菩薩、そして大通智勝如来などの登場によって、諸法実相・久遠実成、そして成仏が困難ではないことを説くなどの、『法華経』の思想的にすぐれた特徴が、きわめて明快に説き示されていくことがわかる。

【註】

(1) 平川 彰氏は『法華経』のすぐれた特色として、以下のような6点を挙げている。

- ①鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』は読誦經典としてすぐれている。
- ②後半には経巻受持の功德を説く。
- ③長者窮子喩・良医治子喩などによって仏陀の大慈悲が巧みに示される。
- ④寿量品に般若・華嚴とことなる久遠実成の人格的仏身論が説かれる。
- ⑤仏の大慈悲によってすべての衆生を成仏にみちびく一乗の教理が説かれる。
- ⑥方便品・不軽品には成仏は困難ではないという思想がみえる。

本稿では、これらの特色のうち④⑤⑥について取り上げることとし、他の特色については別の機会に論じたい。平川 彰「大乘仏教における法華経の位置」（『講座大乘仏教—法華思想』春秋社、1983年）を参照。

- (2) 増谷文雄『ブッダ・ゴータマの弟子たち』講談社、1971年等を参照。
- (3) 『真訓両読 妙法蓮華経開結』平楽寺書店、1962年、87～97頁。本稿では、『法華経』を書き下して表記したので、出典については本書に拠った。以下『開結』と略称。
- (4) 渡辺宝陽『法華経・久遠の救い』NHK出版・1994年等を参照。
- (5) 『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺、1952年、551頁・真蹟曾存。以下『定遺』と略称。
- (6) 『開結』176頁。
- (7) 『開結』191頁。
- (8) 『開結』203頁。
- (9) 田賀龍彦『授記思想の源流と展開』平楽寺書店、1974年。久保継成『法華経菩薩思想の基礎』春秋社、1987年、222頁。渡辺宝陽『法華経・久遠の救い』NHK出版・1994年、125頁、等を参照。
- (10) 『定遺』563頁・真蹟曾存。
- (11) 『大正新脩大蔵経』14巻522頁 a～b。以下『正蔵』と略称。

- (12) 『開結』 260～2頁。
- (13) 『定遺』 90頁・真蹟曾存・原漢文。
- (14) 『開結』 393～4頁。
- (15) 『開結』 400～1頁。
- (16) 田村芳朗・藤井教公『仏典講座7 法華経』大蔵出版、1997年、741頁参照。
- (17) 『開結』 416頁。
- (18) 『開結』 113～4頁。
- (19) 『講座大乘仏教—法華思想』春秋社、1983年、4頁を参照。
- (20) 『開結』 488～9頁。
- (21) 『開結』 496～7頁。
- (22) 『講座大乘仏教—法華思想』春秋社、1983年、4頁を参照。
- (23) 『定遺』 1059頁・真蹟現存、『正蔵』12巻419頁 a。
- (24) 『定遺』 1391頁・真蹟曾存、『正蔵』12巻524頁 c。
- (25) 『正蔵』12巻420頁 a。
- (26) 『正蔵』34巻212頁 c。
- (27) 『定遺』 1225頁・真蹟曾存・断簡現存。
- (28) 『定遺』 706～7頁・真蹟現存・原漢文。